
現実主義者

真弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実主義者

【Nコード】

N2993R

【作者名】

真弥

【あらすじ】

現実主義者・有森有は、宇宙人や幽霊といった、非現実的な存在を子供の頃から信じなかった。

しかし彼には、自分の知らない恐るべき能力があった。

そんな彼の元に、一人の宇宙人が訪れる。

- 宇宙人 -

「そうだ。君の能力が、人類を滅ぼすのさ」

俺の目の前に立つ彼が俺に言った。

俺には、彼のいつている言葉の意味がわからなかった。

いや……わかるうしなかったただけかもしれない。

「人類の為に、君は死ぬべきなんだ」

子供の頃、ヒーローごっこが嫌いだった。いや、正確に言えば、架空の物全てが嫌いだった。俺は、物心ついたときから、『現実主義者』だった。

テレビで見るヒーローやアニメ、怪奇現象にいたるまで、自分の目で確認できない全ての物を信じていなかった。嫌いだった。

架空の物を見たり話したりする事が、一体なんの為になるのか不思議だった。だから、俺にとって架空の物は、無意味な物だった。

特に俺が嫌いだったもの。それは、未確認飛行物体や宇宙人と呼ばれる物だった。

そんな『現実主義者』の俺が、非現実的なモノに出会うのは、今思えば必然的だったのかもしれない。

今朝のニュースでアナウンサーが、驚いたように言っていた。

『未確認飛行物体…… UFO が現れました』

そんな言葉、俺が信じるはずはなかった。

宇宙人

学校が終わった。いつものように自宅に帰ろうとする俺に、クラス友人が、声をかけてきた。

「おい、有。昨日、面白いゲーム買ったんだ！ 今日俺の家にやり

にこない？」

僕は首を振った。ゲームも俺にとっては、ただの架空の話だった。きつと、こんな高校生は、世界中探しても俺だけだ。現代に生きる中学生にとって、ゲームという遊びは、一般的だった。しかし、俺だけは違った。

「悪い。ゲームに興味ないからさ」

俺が言くと、友人はため息をついた。

「知ってるよ。めっちゃめっちゃ面白いのに」。いいよ、わかった。またサッカーでもやろうな！　じゃあな！」

そう言って、友人は走って帰っていった。

俺はたまに、何故こんなにも、非現実的な物を嫌うのか、自分でもよくわからなくなることがある。しかし、物心ついた頃からそうなのだから、きつと、一生このままなのではないかと、半ば諦めかけてる。

ぼーっと、空を見ながら歩く事数分で、自分の家の前に来た。ドアを開けると、キッチンから、母が姿を現した。

「有ちゃんお帰り。友達が来ているわよ」

母親はそう言って、キッチンへ戻っていった。俺は、靴を脱ぎ、家にかかるなり、首を傾げた。誰だろうか？　今日は誰とも遊ぶ約束はない。

「誰が来てるの？」

キッチンに向かった俺は、母に質問した。母は、お皿に切り分けたケーキを置いている。

「誰だったかしら？　名前はわからないけど、少し変わったお友達だったは」

そう言われても見当がつかない。一体誰が来ているのだろうか？　「有ちゃんの部屋で待ってるから、早く行ってあげなさい。すぐにケーキとジュース持って行ってあげるから」

そう言って母は、冷蔵庫からオレンジジュースを出し、コップに注ぎ始めた。仕方なく俺は、二階にある自分の部屋に行く事にした。

誰が来ているのか謎のまま、俺は部屋の前までやってきた。少し緊張しながら部屋に入ると、俺は愕然とした。俺のベッドに、見知らぬ人が腰をかけているではないか。

その男性は、二十五歳位だろうか。髪は金色で長髪、アイドルのような凛々しい顔で、目も輝いている。まるで少女漫画の世界から出てきたのではないかと思えるほどの美男子だった。服は白いスーツ上下、中には黒いワイシャツを着て、赤いネクタイを締めていた。一瞬どこかのホストかと思えるくらい、胸のポケットに刺さった赤いバラが似合っていた。しかし、問題なのは、頭部に生えた、二本のアンテナだった。頭に装着しているようにも見え、頭から直に生えているようにも見える。とにかく、先端に丸い物が付いた、白いアンテナが二本立っているのだ。

「……あ、あの」

俺がそう呟くと、その男は僕を見るなり、笑顔を見せた。

「君が噂の有森有くんだね？」

「噂かどうわかんないけど、そう。あんた誰？」

俺が言うと、男は立ち上がって俺に近づいてきた。何だか、危険な臭いがする。こいつは一体誰なのだ？

「ボクかい？ ボクの名前はアダム。君達の言葉で言う『宇宙人』だよ。知っているだろ？」

目の前の変人が、そう言った。あまりにも唐突な言葉に、俺は言葉を失った。

「有ちゃん。おやつ持って来たわよ」

母の声が聞こえた。俺は思わず、部屋から出て、ドアを閉めた。今、見たものは錯覚だったのだ。俺は自分に言い聞かせた。

「どうしたの？ 部屋の前に突っ立って」

階段を上がってきた母が、僕にそう言った。

「な……何か変なものを見た気がして」

「有ちゃん!!」

母がいきなり怒鳴った。

「お友達の事を、変だ何て言っちゃだめでしょ!!」

何か俺、怒られているんだけど……。初めて見た彼の事を友達と
思えるはずない。それにおかしい。母が彼を俺の友達だと信じてい
る理由がわからない。

「ごめん」

とりあえず謝った。すると母は、笑顔に戻り、俺にケーキとオレ
ンジジュースが乗ったお盆を渡し、階段を降りていった。

どうする事も出来ないのも、俺は部屋に戻った。アダムと名乗っ
た、自称宇宙人の男は、また、ベッドに腰を下ろしていた。

「……誰？」

俺がまた質問すると、アダムは笑顔で僕を見つめた。

「そんな硬くならないで。楽にしてくれ。それに、君とボクとの仲
じゃないか。敬語なんて使う必要ないよ」

ここ俺の家なんだけど。それに、君とそんな仲になった覚えない
し。

「……誰？　っていか何？」

「だから言っているだろう？　ボクは『宇宙人』さ。正式には『エ
デン』という星に住むエデン星人だけだね」

え？　本気で言っているの？　俺は目の前の変人の言っている事
がいまいち信じられなかった。

「疑ってるよね？　明らかに疑っている目だよね？　いいだろう。」

ボクが宇宙人だって証拠を見せてあげるよ」

そう言つと、アダムは立ち上がった。そして、目を瞑り、両手の
人差し指と中指を、こめかみに当てると、何かを念じるような素振
りを見せた。

「な、何やってるの？」

「今から、君の身近な人に、超能力で危害を加える。そうしたなら、
君は必然的に、ボクを信じるだろう」

何を言い出すのだろうか？　ありえない。そんな事出来るはずが

ない。しかし、いや、まさか……。俺はどうしたらいいのかわからなかった。

「ほら……。危害を……。今！ 今与えたぞ！」

アダムが叫んだ。信じていないはずなのに、俺は慌てた。俺の身近な人……。母さん！？

俺は、急いで下の階に降りて行った。もし、アダムが何かしたのなら……。母さんが危ない！

「母さん！」

僕はそう叫びながら、キッチンを覗いた。

「どうしたの有ちゃん……。そんなに慌てて」

母さんは無事だった。何も起こっていなかった。急に笑いが込み上げてきた。馬鹿だ俺は。何を慌てていたんだ。そんなはずないだろ。そんな事出来るはずがない。

『ピンポーン』

急にチャイムが鳴った。誰だろうか。俺は玄関に向かった。ドアを開けると、隣の家に住む、山田のお婆ちゃんが立っていた。昔から隣の家という事もあり親切にもらっている、俺にとって実のお婆ちゃんのような存在だ。昔から病弱だったが、俺が中学の頃、旦那さんを亡くしてから、一段と元気が無いように思える。

「あ、お婆ちゃん。こんにちは。どうしたんですか？」

俺が言うつと、お婆ちゃんが泣き出しそうな顔で、俺に言った。

「有ちゃん……。大変な事になった……。助けておくれ」

「どうしたんですか？」

「これを見てくれよお」

そう言うつと、山田のお婆ちゃんが、俺に背中を向けた。お婆ちゃんの背中には『くそババア』と書かれた紙が張られていた。

「鏡を見たらよお、これが張ってあつてのお、取ろうとしたんだがよお、届かなくてのお」

一体誰がこんな事を？ 俺は、すぐにその紙を剥がしてあげた。
「これ、何なんですか？」

「それがわからんのだよ。気が付いたら付いておったんじゃ。誰に付けられたのじゃか……ありがとよお」

そう言つて、山田のお婆ちゃんは、家に帰っていった。

こんな悪戯をする奴がいるなんて。俺はため息をつきながら、部屋に戻った。ドアを開けると、勝ち誇つたように腕組みをするアダムが立っていた。

「どうだ！ 凄いだろ？」

「え？ 何が？」

母さんは無事だった。何も危害などない。

「ボクの超能力だよ。これでボクが宇宙人だと信じてくれただろ？」

「えっと……何も危害にあつてないけど？」

俺が言つと、アダムは不思議そうな顔をした。

「え？ 間違いなくあつたぞ？」

俺は首を傾げた。一体何が？ ……まさか。

「あのお婆ちゃんの背中に紙を張つたのは、ボクだ！」

「は？」

何を自信満々に言っているんだろうか？ あれが災難とでも言うのだろうか？ 山田のお婆ちゃんには悪いけど、あんな事で何の危害もない。

「どうだ？ ボクの力を思い知つただろう？」

「いや……逆に啞然とした。何か馬鹿みたい。だいたい、宇宙人なんて信じられるわけ……」

俺は、そこまで言いかけて、呆然としてしまった。何故だろう？

アダムが俺の顔を見て、泣いている。

「え？ なんで泣いてるの？」

アダムは、スーツの袖で、涙と鼻水を拭いながら、必死に何かを訴えるような目で、俺を見つめていた。

「な、何か？」

「君はどうして、そう現実主義者なのだい？ もっと、ボクたちのような異世界の人間を信じてみたらどうだい？」

どうやら一生懸命僕に説得をしているようだが、何を言いたいのかわからない。

「だいたい、君のその現実主義のせいで、大変な事になっているのだから、少しは自粛してだな……」

「え？ 今何て言った？」

俺が言うと、アダムは首を傾げた。

「少しは自粛して……」

「そんなお決まりな答えはいいから、その前に言った事だよ。俺のせいであって……」

そこまで言うと、アダムは、驚いたような目つきで、俺を見た。何なんだ？

「き、君は自分の能力を知らないのかい？」

「の、能力？」

何を言っているのだ？ 俺の能力？ 意味がわからん。

「そうか、なるほどな。君は自分の能力を知らずに生きてきたのか」

「いやだから、能力って一体……」

「だからなのか、しかし、そうなるかどうか……」

「話し聞いている？ 教えるよ、能力って……」

「待てよ、って事は、この先まずわボグドブウエガ……」

気が付くと、俺はアダムの頬を思いっきり殴っていた。無意識のうちに。なんかムカついた。

「痛い！！ 何すんの！？ あゝ！ 血が出てる！ 口の中切れた……」

「いい加減にしるよ！ 一体何の話しているのか教えるよ！」

俺がそう叫ぶと、流石にアダムも反省したのか、涙をまた、スーツで拭い、ベッドの上で正座した。

「いいかい？ 君が生まれながらの現実主義者で、自分が非現実的だと思うものを信じないというのは理解しているが、今からボクが言う事は、全て現実なのだ。嘘は言わない。信じて欲しい。いいかい？」

今までのアダムとは別人ではないかと思えるほど、真剣な眼差しだった。俺は息を呑み、静かに頷いた。

「君は、人間の中で希少な能力の持ち主なのだ。君は現実主義者。それが君の能力なのだ」

「現実主義が能力？ もっとわかりやすく言ってくれよ」

「簡単に言うと、君の能力は『非現実』だと認識したものを消してしまう能力。それが君の能力なのだ」

まさか。俺にそんな能力があるなんて。そんなはずはない。俺はいたって普通の人間だ。

「きつと君の性格上、今の話も信じられないかもしれないが、本当の話なんだ。実際に、ボクは知っている。君の能力のせいで、他の星の種族が消えていった。信じられないかもしれないが、君の能力は『現実』なのだ」

信じられない。むしろ、信じろというほうが無理だ。俺にそんな能力があるなんて、信じられるはずがない。

「ボクたちは、君がその能力の事を知っていると思っていた。だから、君が意識的に能力を使い、ボク達のような、宇宙人と呼ばれる種族を絶やしていると考えていた。だから今回、ボクは君を説得しに来たのだ。会って話せば、わかってもらえると思って。しかし違ったのだな。ならば、すぐには言わない。ボク達を信じてくれ。本当にいるのだ。信じてくれれば、ボク達は存在できる」

アダムはそう言って、俺に頭を下げた。

「でも、無理だよ。ずっと信じていなかったものを信じるなんて。それに、あんただって、どう見ても人間と変わらないじゃないか。普通に話せるし」

「これは地球人に変装しているだけなんだ。それに、何故地球人の言葉が話せるか知りたいかい？」

アダムが、言いたそうな顔で俺を見た。そうか、本当に宇宙人なら、この地球にはない技術が発展しているだろう。そんな高度技術を使って、日本語を話せるようになったに違いない。

「ボクの星の技術をなめてもらっては困る」

やっぱりそうなのか。凄い。俺の知らない星の技術は、この地球とは比べ物にならないほど進んでいるんだ。

「ボクは自分の星で通信教育により、日本語をマスターしたんだ」

「俺の感動返せ！」

気が付くと俺は、アダムの際を掴み、激しく揺さぶっていた。

「なんで！？ 何かまずかった！？」

俺は自分を落착かせた。こんな事で怒っていたらきりが無い。

それに、もっと聞かなきゃいけない事がある。

「どうして俺がそんな能力を持っているんだ？」

「それが、どうやって調べても、原因がわからないのだよ。謎なんだ」

まだ、自分の能力を信じられたわけではないが、アダムの真剣な話を聞いていると、嘘だとも思えなくなっていた。

「でもおかしくない？ 俺にそんな能力があったとしたら、既に俺たも消えていてもおかしくないだろ？」

仮にそんな能力が俺にあったとしたら、異星人は存在しないはずだ。だって俺は異星人を昔から信じていないのだから。

「この地球に、能力者である君が産まれた事は、全世界に知られている事実なのだ。十年ほど前、ある種族が宇宙で忽然と姿を消した。その原因を調べた結果、君の能力がわかったんだ。だから僕たちの様な宇宙人と呼ばれる者達は、地球にいろいろな細工をした。UFOで地球に接近したり、ミステリーサークルを作ったり。たまにテレビでも見るだろ？」

確かにテレビの特別企画とか何とかで、そんな特集やっていることもある。でも、信じたことはなかった。

「きつとそんなの見てても信じないだろうが、君はその話を聞いたとき、心の奥底では、本当はいるのだろうか？ と、微かに思っている。君自信が気が付かないほどではあるがね」

そう言って、アダムは、俺の胸に向かって人差し指を突き出した。

「君が少しでも、僕の存在を認識してくれれば、僕は生きていられる。消滅せずにいられる」

今でも信じられない。俺のこの現実主義が、彼の言う宇宙人を消滅させているなんて。なんだか自分の能力が怖くなった。まだ実感は出来ないし、どうやっても信じられないけど、アダムの言っている事は現実のようだ。

「最初は少しずついい。僕を信じてくれ。それだけでいい」

そう言って、アダムは微笑んだ。

急に窓の外が明るくなった。スポットライトのように眩しく、俺の部屋を照らした。

「迎えが来たようだ」

そう言って、アダムは窓を開けた。

「また遊びに来るからね。君が僕の存在をしっかりと認識してくれるまでは」

アダムはゆつくりと光の中へ消えていった。そして気が付くと、光が消え、夕暮れの空が窓から見えた。

「有ちゃん、夕飯できたわよ」

母さんが階段の下から俺を呼んだ。見ていたコミック雑誌をベッドに放り投げると、俺はリビングに向かった。おいしそうなカレーの匂いがした。母さんのカレーは世界一おいしいと、俺は思っている。

食卓にはカレーライスが五皿並び、真ん中にはサラダが用意されていた。俺はテーブルに着くと、目の前に用意されたカレーライスの香りを嗅ぎ、笑顔になった。

キッチンからスープを持った母さんが席に着き、スープをテーブルに置く。それを妹が一人一人の目の前に並べていく。父さんは新聞を読みながら席に着くと「今日はカレーか」と嬉しそうにテーブルを見渡す。

「何だか久しぶりだね。家族揃って夕飯って」

妹の杏が言った。

「最近はお前がいらないから、今日は嬉しいな」

そう言つて、父さんが杏の頭を撫でた。妹は吹奏楽部に入つていて、大会に向けて練習に余念がなく、部活動を遅くまでやっていたので、夕飯を一人で食べる事が多かった。杏の言つ通り、家族四人で夕飯を食べるのは久しぶりの事だった。

「では、いただきますか」

父さんがそう言つと、みんな手を合わせた。

「いただきます」

みんなの声が一緒になった。俺はスプーンでカレーを口に入れる。思ったとおりの味が口の中に広がる。やっぱり母さんのカレーは世界一だ。

「ちよつと、それ取つてくれないか？」

父さんが福神漬けの入つたビンを指差して俺に言った。俺は目の前にあるそれを父さんに渡す。

「あ、次僕も下さい」

そう言つて、父さんから福神漬けを受け取る。

「お母さん、おかわりある？」

まだお皿半分も食べていない杏が母さんに確認する。

「はいはい。まだまだいっぱいありますよ」

母さんは笑顔でそう答える。

「こんなにおいしいカレーなら、何回でも食べれますよ」

もう、限界だった。自然を装う事が出来なくなつた俺は、次の瞬間には叫んでいた。

「何でお前がいるんだよ!!!」

俺の言葉に、アダムはキョトンとした顔で俺を見つめた。

「何勝手に有森家の団欒に潜入してんだよ!!! お前帰つたんじゃねえのかよ!!!」

「また遊びに来るつて言つたじゃないか」

「早いよ!!! 間隔が短いよ!!!」

「有ちゃん、お行儀が悪いでしょ。アダム君を見習いなさい」

母さんが当たり前のように言った。

「そうだぞ。アダム君のこのテーブルマナーをしっかりと見なさい」

父さんが言った。っていうか、カレーにテーブルマナーって……。

「お兄ちゃん、いいから食べよ。おいしい物は味わって食べないと

……」

『ね』

何俺の妹と『ね』ってしてんだよ。何気が合ってたんだよ。え？

俺だけ？ 俺だけ空気読めてない感じなの？ 何で？

「有ちゃん、今日からアダム君も家族なんだから、仲良くしなさい」

か……家族？

こうして、俺に、宇宙人の家族が出来た。

・トイレの花子さん・

トイレの花子さん

「なあ、有知ってる？ あの噂」

友人の進一が俺に言った。進一は、俺の小学校からの親友で、俺とは正反対の非現実を信じている人間だ。宇宙人や幽霊を信じているし、そういう噂話も大好きだった。

「何だよ、噂って」

俺がそう言うと、進一はニヤリと微笑み、話し始めた。

「これはこの学校の七不思議の一つ。トイレの花子さんの話なんだけどな。四階の女子トイレの入り口から四番目の扉が、いつも閉まっているらしいんだ。何故だか昔から使用禁止になっているらしくて、だれもそのトイレが開いてるところを見たことがないんだってさ。それがさ、夜の四時四十四分、そのトイレを四回ノックすると

……」

そこまで言って、進一は俺に顔を近づけた。

「『入ってます』って女の子の声が聞こえるらしいんだ」

よく聞く話だ。もちろんこの話だって信じられない。

「そんなの嘘だよ。ありえない。だいたい、誰が夜中の四時四十四分に学校にいるんだよ。たまたま使用禁止だったトイレが四階の入り口から四番目だったから、誰かが作った作り話だろ」

俺がそう言うと、進一はため息をついた。

「出たよ。有の現実主義。いい加減、そういう考え方変えたらどうだよ」

そんな事言われても、今までの考え方を变えるのなんてかなり難しい事だ。まあ、別に变えようと思った事もないし。でも、昨日から家に住み着いた宇宙人のせいで、少しは変わりつつあるがな。

「そこまで言うなら、今日試しに行こうぜ」

進一は嬉しそうに俺に提案した。

「嫌だよ。寝たいし」

「明日休みなんだから大丈夫だろ？ もし花子さんがいなかったら、もうお前の現実主義についてとやかく言わないからさ。ただ、もし花子さんがいたら。一週間俺の命令を何でも聞いてもらうからな」

まあ、どうせ嘘に決まっているのだし、この先進一に俺の考え方の事で文句を言われないのなら、付き合ってもいいか。

「わかった。行つてやるよ」

「おっけい。決まりだな。今日の夜四時に校門で待ち合わせ。逃げるなよ」

そう言つて、進一は自分の席に戻つていった。英語教師が部屋に入つてきて、英語の授業が始まつた。

「ただいま」

家に帰り、玄関を開けながらそう言つた。誰の返事もない。母さんは買い物にでも行つているのだろうか？

靴を脱ぎ、リビングの扉を開けた。誰もいない。冷蔵庫に向かい、缶ジュースを手に取り、自分の部屋がある二階へ向かつた。

四時集合か……。眠くなりそうだから、今のうちに一眠りしておこうか。そう計画を練りながら、俺は自分の部屋のドアを開けた。

「おかえり」

爽やかな顔で、アダムが俺に言つた。こいつの存在すっかり忘れてた。何か急にテンションが下がつた。

「お前さ、帰れよ。何だっけ、ジモン星？」

「『エデン星』だよ！！間違えないでくれ。僕がいるのがそんなに嫌なのかい」

「うん」

「即答かよ！！君つてやつは失礼な地球人だな」

あゝウザイ。っていうか、こいつが何で家に居座っているのかわからない。だいたいさ、おかしいと思わないのかね、うちの家族は

何かたまに思うんだよな。俺がこんなに現実主義なのに、両親も妹も、何でも受け入れちゃうっていうか、俺だけ何か違うっていうかよくわかんないけど。

「まあいいよ。あのさ、今日ちよつと夜、用事があるから、寝るよ。どっか行つてくれない？」

俺の言葉に、アダムは首を横に振った。

「それは出来ない。今日は君に会いに、お客さんが来ているのだから」

客？ 少し嫌な予感がする。あれか。宇宙人か？

「あなたが有さん？」

背後から女性の声がした。俺は慌てて後ろを振り向いた。そこには、セーラー服の女性が立っていた。髪は黒髪でロング。赤いピアスと唇が白い肌によつて強調され、大きな目が特徴的だった。だた気になる事を一つだけあげるとすれば、彼女の体を通して、背景である俺の部屋が透けて見えるということだ。

「おい！！ 何て奴を連れてきたんだお前は！！」

俺のエルボーが、アダムの頬へ炸裂した。

「痛い！！ やりすぎだよ！！ っていうか僕が連れてきたんじゃない。彼女がここへ来たんだ」

一体、俺に何の用があるっていうんだ。信じない。信じたくない。でも彼女は、まさしく、幽霊じゃないか！！

「気付いているだろうが、彼女は真正正銘、幽霊なんだ」

幽霊？ そんなの、いるはずがない。

「ちよつと待てよ。理解に苦しむんだが、その幽霊さんが、俺に何の用なんだよ」

「考えればわかる事じゃないか？ 君に用って事はつまり……」
何となくわかつて来たぞ。あれか、俺の能力つてのに関係あるんだな？

「私を見て」

幽霊が言った。俺は冷や汗を掻きながら、彼女の目を見た。

「私は存在してるの。人間としては死んじゃったけど。幽霊としては、まだ生きているの。でも、あなたが私を疑うから、私……いなく……なりそう」

うわ、何か泣いてるよ。俺が泣かした事になるんだよね？

「ほらほら。君が泣かしたんだよ」

追い討ちをかけるなよ。わかったよ。俺が悪かった事にしておくよ。

「わかった、信じるから。泣かないで」

何で俺が気を使わなきゃいけないんだよ。幽霊なんかに。まだ幽霊だって信じてないけどさ。

「うん。ありがとう。有さんって優しいのね」

どうも。褒められても何も出来ないけどな。

「でも、驚いたよ。本当に幽霊って、透けているんだね」

噂で聞いたことはある。実際幽霊なんて存在しないものだと思うていたから、実際に見ると驚いてしまうが。

「君は何か勘違いしていないか？」

アダムがあきれた顔で言った。

「彼女が透けているのは、君のせいだよ。君が彼女のような幽霊を信じないから、彼女が透けているんじゃないか」

え？ 俺が悪いの？ じゃああれか、幽霊が透けているって噂は、俺の現実主義のせいかな？

まあ落ち着け、今はそんな事どうでもいい。とりあえず、彼女をこの家から出す事が重要だ。アダムの件もあるし、うちの家族に見つかったら、大変な事になる気がする。

「ごめん。俺が悪かった。これからは、君の存在を信じるように努力するよ」

そう俺が言くと、彼女は、目を潤ませながら笑顔でお辞儀をした。そして、俺の前から姿を消した。文字通り、消えたのだ。

「ほう。君のお陰で、彼女は学校へ帰ったようだ」

アダムが言った。俺もほっとして胸を撫で下ろした。

「そうか。それは良かった……」

あれ？ 何かおかしい事を聞いた気がする。

「待て。お前、今何て言った？」

聞き間違いだ。きっとそうだ。アダムは俺の学校へ帰ったなんて言っていない。

「物分りが悪いな。君の学校のトイレに帰って行ったにきまどぶえぐば」

俺の拳がアダムの口を黙らせた。まさか、彼女があの花子さんだったなんて。しまった。まずい。彼女を帰したのはまずかった。今日は進一との約束がある。もし彼女が噂のトイレに帰っているとしたら、俺は一週間、進一の奴隷と化してしまう。どうにかしなければ。

「おい、アダム。お前、もう一度あの子を連れて来いよ」

「あゝ。まず謝るとかないんですか。ないんですね。何度も言うようだけど、彼女は自らここへ来たんだ。彼女の意志でね」

しまった。もう少し考えて彼女を帰らせれば良かった。っていうか、今更ながら、進一とあんな約束しなければ良かった。今から止めようとか言ったら、あいつ俺のこと怖がりだとか馬鹿にするだろうし。まいったな。

「どうしたのだい？」

アダムが俺にそう言ってきた。こいつに話したって無駄だろうな。でも、こんな奴でも、もしかしたら役に立つかもしれない。俺はそう思い、アダムに進一との賭けの話をした。

「なるほど。それはまずいな」

アダムが頷きながらそう言った。その後しばらく黙っていたが、何か思いついたようににやりと笑い、俺の目を見た。

「僕に良い考えがある。君を助けてあげよう」

まさかこいつの口から、そんな言葉が出てくとは思わなかった。それにかなり得意気な顔をしている。

「要するに、君達が学校に来た時、彼女が学校にいないればいいん

だろ？ そんな事、簡単な事さ。アダム星の技術をなめてもらっては困る」

なにやら怪しげな発言ではあるが、今のアダムは何故か頼れそうに思えてしまう。

「どういうことをするんだ？」

「それは言えない。言ってしまったては、効果が半減するからな」

効果が半減？ とても怪しいが、でも今は藁にも縋る思いだ。こんな奴でも、何とかしてくれるのならありがたい。

「なら任せていいんだな？」

俺の問いに、アダムは親指を立てて答えた。

進一との約束の時間が来てしまった。俺は重くなった足をどうにか動かし、学校の前までやってきた。

「遅いよ！ 早く！」

正門の前で、進一が俺を手招きした。近づく、進一がやたら重装備な事に気が付いた。頭にはライト付きのヘルメット。首にはデジカメを掛け、大きなリュックサックを背負っていた。サバイバル用のベストには多くのポケットが付いていて、どのポケットも膨らんでいた。対する俺はというと、とりあえず持ってきた懐中電灯のみの軽装備である。

「お前さ、キャンプにでも行くのかよ」

俺がそう言うと、進一はため息をついた。

「お前は何かわかっていないな。幽霊ってのはだな、寂しさのあまり、人間を拒絶した存在なのだ。だから時として、人間を襲ってくる。いつ何時何が起っても大丈夫なように、最低限の準備は必要さ」

進一が思い描く幽霊のイメージがわかったところで、俺は彼を無視して、校門を飛び越えた。進一も俺を追うように校内に侵入した。校庭を歩き、一階の非常口から校内に潜入した。今日のことを考えて、予め内側から鍵を開けていたのが正解だった。中からだち

ようど階段の裏側にあたるため死角になる場所で、あまりこの非常口を認識している人が少ない事が好都合だった。

二人は、それぞれの明かりを頼りに、何と云うか、別に幽霊とかそういう存在を信じているわけではないが、暗い校内はやはり怖い。人間は、先の見えないものには恐怖を感じる生き物なのだ。暗闇、人生、死。思えば幽霊という存在なんて、死を恐れた人間が創り出した幻想でしかない。

でもそれをわかっていても怖くなってしまふのは不思議だ。今だって俺の足は若干震えている。

「有、早く四階行くぞ」

そう云って、進一は階段を登り始めた。俺も進一の後が続く。

進一の頭のライトが闇を照らす。普段当たり前のように見ている校内のあらゆるものが、その演出によって不気味に見える。ゆっくりゆっくりと階段を登り、四階まで辿り着いた。俺と進一は、廊下を歩き、噂のトイレの前まで来た。

俺は、急に不安になった。信じてはいない。俺は決して信じてはいないが、このトイレに花子さんがいる気はとてする。矛盾しているようだが、今の俺は真剣にそう思っている。そして不安なのは、アダムがちゃんとどうにかしてくれいるかという事だ。

「有、行くぞ」

震える声で、進一が言った。俺は進一の後ろから、進一の行動を見守った。手前から四番目のトイレ。進一の言ったように、唯一そこだけが閉まっている。やけにそのトイレだけ存在感がある。進一は額に流れる汗を腕で拭くと、そのトイレをノックした。

……返事がない。アダムが何とかしてくれたのだろうか。あいつ、やるじゃないか。俺は少しアダムを見直していた。

「いらっしやいませ」

何かこんな場所では絶対に聞く事のないであろう言葉が聞こえた。進一は啞然とした顔で俺を見る。俺は無言で首を振った。言ったのは俺じゃない。

聞こえたそれは、確かに女性の声に聞こえた。はつきりではないが、俺はどこかでその声を聞いたことがある気がする。

「今、いらっしやいませって言わなかった？」

進一が言った。どうやら空耳ではないらしい。

「どうぞ、お入り下さい」

トイレに入れと？ 俺は耳を疑った。どういうことだ？ 誰かが俺たちを中に招きいれようとしているのか？

「有……俺は開けるぞ」

意を決した進一は、トイレのドアノブを握った。ゆっくり、それを回して、ドアを押す。

刹那、辺りが光に包まれた。眩しくて目を開けることができない。ゆっくりと、目が光に慣れていき、前が見えるようになってきた。そして、目の前の光景に俺は愕然とした。

「お帰りなさいませ。ご主人様」

そこには、ピンクのメイド服に身を包んだ、花子さんがいた。

「え？ お……おい、有、どういうことだ？」

進一は、前後を交互に見ながら、俺に訊いてきた。後ろには、俺たちが今までいたトイレがある。でも、目の前は、明らかにオシャレなカフェだ。彼女の姿から推測すると、ここはどうやらメイドカフェらしい。

「どうぞ、ご主人様。中に入って、くつろいでください」

そういつて、花子さんが俺たちを、奥の席まで案内した。店内はモダンで落ち着いた雰囲気だ。席は四人掛けのテーブルが4席しかなく、お世辞にも広いとは言えない。右億にはカウンターがあり、椅子が4脚並んでいる。部屋の中は、コーヒーの良い香りが漂っている。ここがトイレの中とは思えないほどだ。

「こちらがメニューになります」

花子さんが笑顔で俺と進一にメニューを渡した。メニューは『萌えコーヒー』『萌えサンドウィッチ』『萌えパフェ』と、とりあえず萌えを付けたメニューが並んでいる。

「有……」

進一が小声で俺を呼んだ。表情は真剣だった。

「萌えパフェと萌え季節のシャーベット、どっちが良いと思う？」

頼むんかい！！俺は進一のこの性格が羨ましく思った。

「好きにすれば良いじゃん」

俺の言葉に「ノリ悪いなあ」と呟いて、進一は花子さんに注文をしていた。俺はそれどころじゃない。あいつを探すんだ。あの馬鹿野郎を。

「マスター、萌えパフェ一つ入りました！」

「はい喜んで！！」

カウンターの奥から男の声が聞こえた。あの声だ。あの馬鹿の声だ。

パフェを片手に、アダムが現れた。服装は白いワイシャツに黒い蝶ネクタイ。いかにもマスターといった格好である。

パフェを受け取った花子さんが、進一の前にそれを置いた。ソフトクリームやらチョコレートやら、ポッキーやら、いろんなものが器に入っている。

「お待たせいたしました！！ ゆっくり召し上がってくださいにやん」

語尾にオプションを付けて、花子さんが言った。今わかったんだが、花子さん、かなり恥ずかしがってる。めちゃくちゃ無理して言ってるよ。多分、あいつに言わされてるな。

「進一、ちよつと俺、マスターと話して……」

俺は進一の顔を見て、啞然とした。固まっている。進一が花子さんを見て固まっている。昔からこいつを知っているが、こいつのこの姿は、恋を知っている表情だ。

よし、とりあえずは放置しておこう。俺はマスター気取りの馬鹿に近づいた。

「いらつしゃいますぶえふおああ……！！」

俺の拳が、アダムの頬を的確にヒットした。

「お前よお、これはどういう事だ？」

「空間を捻じ曲げて、トイレとメイド喫茶を繋げ……」

「そう言う事を聞いてんじゃねえよ！！ 何花子さんにやらせてるんだよ！！ お前任せろって言ったよな？ お前、花子さんを学校にさせないの事を言っただけでなかったか？」

にやりとアダムが笑った。

「ここは空間を捻じ曲げてある。学校ではない」

呆れて何も言えない。こいつの笑顔が無性にムカつく。

「とにかく、どうすんだよ。確かに花子さんという幽霊の存在を隠せるかもしれないけどな、トイレの中に、こんな空間があるなんて知られたら、その方がまずいんじゃないかよ」

俺の言葉を聞き、アダムの表情が強張った。

「いや、だからそれは、その……あれだ……ごめんなさい」

アダムは素直に土下座した。この野郎に任した俺が悪いんだ。しかたがない。

「まあいい。とりあえず、この状況をどうにかしなきゃ……」

とにかくだ、進一に花子さんが幽霊だという事を気が付かれてはいけない。もしばれてしまったら、明日から俺の人生は終わってしまう。それだけは避けなければ！！ どうすればいいのか……進一を騙す方法が見つからない。何とかしなくては……。

「おい、有！」

その声を聞き振り向くと、進一が気持ち悪いほどの笑顔で俺を見ていた。

「なんだその笑顔は……」

パフェを嬉しそうに頬張りながら、進一はカウンター裏で食器洗いをしている花子さんを見つめた。

「おい、有よ。あの子可愛いよな」

「あ……ああ」

可愛いよ。十分花子さんは可愛いと思う。ただ彼女はこの世には存在しない幽霊なんだ。進一はそれをわかっていない。現に彼女は

人間と違つて、容姿だつて透けて……

「あれ？」

透けていない？ おかしい。家で会つた時は透けていたのに……。

「君が彼女の存在を認め始めているからさ」

アダムが言つた。その言葉に俺は驚いた。

「俺が彼女の存在を認めている？」

そんなはずはない。幽霊なんて存在しない。存在するはずがないんだ……。

「存在しているさ。現に僕はここにいる。彼女もここに存在している。それが答えさ」

まだ俺の能力つてやつだつて信じていない。俺が現実だと思わないものを、消すなんて……そんな事あるはずがない。

「ゆつくりでいい。少しずつ、全てを信じてくれ。頼む」

アダムが真剣な眼差しで俺を見つめた。こいつのこんな表情、初めてかもしれない。

「……今は返事は出来ないよ」

俺の素直な言葉だつた。今俺にはどうすればいいかわからない。

「わかつているよ」

そう言つて、アダムは笑つた。

「有、何を話しているんだ？ ちょっと来いよ」

進一が俺に手招きをしている。未だにニヤニヤ笑っている。進一の隣に座ると、小声で俺に話始めた。

「あのさあ、あの子俺達と同じ学校かな？」

えっと……詳しく聞いてないけど、多分、ここに住んでる幽霊つて事は……そういう事になるかな。

「そうだと思うよ」

確信はないけどね。

「惚れた……」

出たよ。進一の悪い癖が……。こいつ、花子さんが幽霊がつてわかつてないからな。馬鹿な奴だよ。

……待てよ？ これはチャンスかもしれない。こいつ、花子さんが幽霊だなんて思っていないのだから、俺との約束もチャラになる。これを利用しない手は無い。ただ、この空間がトイレにあったという状況がまずい。

「有。どうした？」

アダムが話しかけた。今思えば、こんな空間を作り出した技術は相当なものだ。こいつは本当は凄い。馬鹿だけど。ここはもう一度だけ、こいつを利用するしかないな。

「アダム……耳を貸せ」

俺はアダムの耳を指で掴み、顔を近づけた。

「おい、この空間を別の場所に移動する事出来ないか？」

俺の言葉に、アダムの表情が変わった。

「僕が誰だと思っているんだい？ エデン星のアダムとは僕の事だよ」

「知らないし、興味が無い。早くやれ」

とても不服そうな顔をして、アダムは目を瞑った。両手の人差し指を左右の米神に押し当て、何か呟き始めた。暫く不思議な呪文を唱えた後、アダムが目を開けた。

その瞬間、辺りが目も眩むほどの光に包まれた。俺は目を瞑った。何が起こっているのかわからなかった。

「目を開けてごらん」

アダムの声が聞こえた。ゆっくり目を開いた。辺りを見回すと、さっきの喫茶店だった。

「……おい、これはどういうことだ？」

俺はアダムを睨みつけて言った。アダムは動じない。それどころか不敵な笑みを浮かばせている。

「成功だよ。さあ、喫茶店から出るがよい」

アダムは俺達が入ってきた入り口を指差した。あのドアを出ると、俺達が通う学校のトイレに出るはずだ。俺はアダムの自信を確認する為に、ドアに歩み寄った。溜息交じりの深呼吸をし、ドアノブを

握り締めた。ゆっくりドアを開けると、そこには見慣れた景色が現れた。しかし、さっき入ってきたはずのトイレではない。別の場所だった。

これがアダムの言う成功なのか？

「どうだい？ これなら学校で大騒ぎにならずに済むだろ？」

確かに……。確かにそうだよ。でもな、俺は納得がいかない。「どうして俺の家のトイレなんだよ！！！」

そう言って、俺はアダムの頬を殴った。怒りが治まらない。俺はこんな暴力的な人間だったろうか。確実なのはこいつが俺の前に現れた時からその凶暴性が露になったということだ。

「痛いよ！ 何だよ！ 良かれと思ってやったのに！」

「あのな！ 『トイレ入ったら幽霊の花子さんがメイドしている喫茶店のあるお家』なんて、馬鹿げてるよ！ アド街にも出てこないよ！」

「便利じゃないか！ 花子さんだって、君に認識してもらえるし、一石二鳥だよ！」

「知らないよ！！！」

はあ、こいつは何故こんなにも馬鹿なのだろうか。溜息すら出ない。とにかく、学校で騒がれないから良しとするか……百億歩譲ってな！！

「とにかく、場所の問題は一時的に良しとしてやる。でも、俺が求めているのはそんな事じゃない。あいつをどうするかって話だ」

俺は進一を指差した。進一は未だに花子さんを見て、デレデレしている。

「あいつは花子さんを幽霊だと感付いていない。でもな、この空間が家に繋がった事を知ってしまったたらそれはそれで問題だ」

俺が言つと、アダムは神妙な面持ちで何かを考え始めた。そして、軽く頷くと俺を見た。

「君の言葉は一理ある。あんまり使いたくないが……背に腹は変えられん」

そう言ってアダムは進一に近付いた。俺は不安な気持ちで一杯だったが、アダムの行動を暫く傍観する事にした。

アダムは何かを進一に伝えた。何を言っているか聞こえなかったが、進一は小さく頷いたのだけはわかった。

アダムはポケットの中から何かを取り出した。何だろう。紐のような物だ。紐をアダムが人差し指と親指で摘み、紐を垂らした。紐の先には何かコイン状の物が付いており、それをゆっくり揺らし始めた。

振り子のような動きをするコイン状の物を進一は目で追っている。暫くをそれを見つめた進一は重くなった瞼に耐え切れず、目を閉じ、寝息を立て始めた。

俺はアダムに近付いていった。ある事を確認するためだ。

「おいお前。まさか、進一を眠らせて、夢オチさせるつもりじゃないか？ 返答によつてはお前を殴る」

「何の事だい？」

アダムがやった事。それは典型的な催眠術だからだ。

「とぼけるな。お前進一に催眠術やっただろ？ 紐の先に付いたコインを見つめさせ、あなたはだんだん眠くなるとか言つて……」

「な……なるほど！ そんな事が地球人は出来るのか！」

驚いてる。これは本気で驚いている。

「流石地球人だな。地球の科学はエデン星の技術に劣らないと聞いた事があるからな」

科学じゃないし。多分。

「じゃあ、お前は何かやっているんだ？ 進一は催眠術受けたように寝ているけどさ」

アダムは自分が持っている紐を俺の前に見せた。

「これがエデン星で開発された記憶抹消装置だ。この紐の先に付いたこの装置を相手に見せ続ける事により、相手の記憶を少しだけ抹消出来る。副作用で相手は眠ってしまうがな」

「……」

気が付くと、俺の魂のこもったアッパーカットが、アダムの顎を殴打していた。

「最初からやれ!!」

進一を俺のベッドに寝かせると、俺は深く溜息を付いた。

「ユウ……ごめんね」

後ろでアダムが、涙を流して泣いている。せつかくのホスト顔が台無しだ。

「いいよもう。それより、ちょっと話しないか？」

そう言っただけ俺は、ベランダに出た。後からアダムも出てきた。俺は柵に寄り掛かると、空を見上げた。

「アダム……あのさ。何で俺なのかな」

自分自身、何が言いたいのかわからなかった。ただ、一つ頭の中に何度もしプレイされている映像がある。さつき隣にいる自称宇宙人が言った言葉だった。

『君が彼女の存在を認め始めているからさ』

アダムは言った。子供の頃からそうだった未確認生物やら怪奇現象やら信じていなかった俺が、宇宙人や幽霊を信じているなんて俺には信じられなかった。

「君の能力の事かい？」

アダムが言った。横を向くと、俺と同じように空を見ている。

「……ああ。何で俺にそんな能力があるんだろうな」

「さあ……僕にはわからないよ」

アダムが静かに言った。

「俺は昔から、架空の事だと思っただけを信じてこなかった。現実主義なんて誰かが言い出したけど、そんなかつこいいものじゃないと思う。信じない。……そう思っていたけど、もしかしたら俺が一番……」

言葉が詰まった。その先を自分の口から言うのが怖かった。

「人間には才能があると聞く。足が速い者。絵が上手い者。頭が良

い者。君はそういう能力を持つ才能だったってだけの話さ」

アダムなりに俺に気を遣ってくれているのだろ。俺はその時素直にそう思った。

「ありがとう」

言葉にならないほどの小さな声で俺はアダムに言った。アダムがその言葉に気が付いているのかわからなかったが、俺の顔を見て笑った。

「ユウ。見てみる。あの輝く星、あれがエデン星だ」

アダムの指差す方向に、一際輝く星があった。アダムの母星。あそこに、アダムと同じ様な宇宙人が住むと言うのか。

「信じない」

俺が言っていると、アダムは俺の肩にそつと手を置いた。

「今はそれで良いんじゃないかな」

そう言って、アダムは部屋の中に戻っていった。暫く空を見つめた後、俺も部屋に戻る事にした。

部屋に戻ると、アダムはベッドに腰を掛け、俺の部屋に置いてあった漫画を読んでいた。ギャグ漫画なのにとっても真剣な顔で読んでいる。視線を動かすと、俺はある事に気が付いた。

「……おい、アダム。進一は？」

ベッドに寝ているはずの進一が、姿を消していた。俺は何が起ったのか理解できず、辺りを見回した。

「彼なら眠い目を擦りながらトイレに向かったぞ」

- 人面犬 -

人面犬

「人面犬って知っているかい」

進一が、帰り仕度をしている俺に言ってきた。またこのパターンか。すでに嫌な予感がする。

「あれだろ？ 人の顔した犬の事だろ？」

俺の言葉に、進一が驚いた顔をした。

「意外だな。お前が知っているなんて」

どうせ知らないっていったら、こいつは話し出すだろう。そのほうが面倒だ。

「この学校の七不思議の一つでさ、放課後学校横の通り道で、人面犬に追われるって話らしいぞ」

出た。お決まりの七不思議。またくだらない事を言い出したよ。

「そんな顔して……現実主義者め」

「わかったよ。何だよ。その人面犬がどうしたって？」

「探しに……」

「断る」

学校を出た俺は、焦る気持ちを抑えながら帰還した。急いで部屋に戻ると、アダムがいた。気に入ったのか、最近毎日のように漫画を読んでいる。

「お帰り。どうした？」

「人面犬を出せ」

我ながら意味もわからん事を言っている。でもきつと既にいるんだろ？ 俺だって馬鹿じゃない。進一が話をすると家に来るお決まりなパターンにする気だろ？

「ごめんなさい。何の事だかさっぱり」

とぼけている様子では無いようだ。ただの早とちりで済めばそれで良い。

俺は混乱しているアダムを残し、リビングへ向かった。リビングに入ると、母さんが洗濯物を畳んでいた。俺に気が付くと笑顔でおかえりと言った。冷蔵庫から牛乳を取り出すと、コップに注ぎ、それを飲み干した。

ソファを見ると、杏の鞆が置いてある事に気が付いた。

「あれ？ 杏帰ってきてるの？」

「そうよ。今日部活が休みだったんだって」

珍しい事もあるもんだ。俺はリビングの先にある庭を見た。

杏が人面犬と戯れていた。

「お前が全て悪いんじゃない！」

犬が俺に怒鳴った。凄くご立腹だ。自分の部屋なのに何故か床で正座をさせられている。アダムも流れで同じ様に正座をさせられている。勉強机の椅子に座っているブルドックが、俺達を見下している。

そう、ブルドックだ。そうに違いない。あの短い手足。可愛らしい尻尾。たるんだ腹部。あのフォルムはブルドックに違いない。たまたま顔がどつかのおじいさんに似ているだけだ。たまたま、そいつが何か嫌な事があって俺に怒鳴っているだけだ。

「何だその顔は、お前は自分が悪いって思ってるのか！」

そう。たまたま犬が、人間の言葉を言葉覚えてただけだ。

「ユウ。僕は昔聞いた事があるのだが。この方は地球の愛玩動物の犬だろう。しかし、僕は知らなかった。犬が地球人と同じようにしゃべるのだとは」

「普通はしゃべらない」

「お前達！ 何しゃべってるんじゃない！ 今時の若いモンは、教育がなっておらん。わしが質問した時だけ口を開け！」

ブルドックは顔を真っ赤にして怒ってる。何が気に入らないのだ

ろつか。というか、何故俺は怒られているのだろうか。

話は十分前に遡る。

杏とブルドックが庭で仲良く走り回っているのを、俺は窓の中から冷たい視線で見ている。俺に気が付いた杏は、窓を開け、ブルドックを抱きしめ、俺の前にブルドックを差し出した。

「お兄ちゃん、このワンちゃん迷って家の庭に来ちゃったみたい。可愛いでしょ」

可愛くない。だって怒ってるもん。さっきまで、杏と凄い笑顔で走り回ってたのに、俺と目が合うなり、怒ってるもん。

「可愛いね。杏、そのワンちゃん。お兄ちゃんとも遊ばしてもらっていいかい？」

杏は少し不満そうな顔をした後、杏が宿題を終えるまでという時間制限を条件に、ブルドックを俺に手渡した。

俺は杏にブルドックを借りた後、急いで部屋に戻った。

「アダム！ お前やっぱりこいつを連れてきたな」

俺が言うと、アダムは首を横に振った。

「とぼけるな！」

俺はアダムに近付くと、アダムの胸倉を掴んだ。

「放せ！」

「何だと！ アダム、もう一回言ってみろ！」

「違います！ 僕は言っていない！」

そう言って、アダムは恐る恐る俺の胸元に指を刺した。俺が下を向くと、ブルドックが俺を睨むつけて言った。

「放せと言っているだろうか！」

そこから、何だかんだで、今の状況だ。未だに、何故こんなにも怒っているのかわからない。

「お前のせいで、俺がどんな目に遭ったか……」

そう言って、今まで怒っていたブルドックが泣き始めた。

「あの……お言葉ですが、貴方に会った事は今日が始めてでして……」

……」

俺がそう言うと、ブルドックの泣き声が止んだ。ゆっくり顔を上げ、俺を睨んだ。

「お前……まだわしが誰だかわからんか……昔からこうやってお前を叱っていたのに」

叱っていた？ 俺は記憶の中をその単語で検索した。そして、ある人物に行き着いた。思い出した俺の過去の映像と、目の前に座るブルドックの顔が、リンクした。

「や……山田のお爺ちゃん」

山田のお爺ちゃん。俺の隣の家に住んでいたお爺ちゃん。アダムが始めて家に来た日に、いたずらをした山田のお婆ちゃんの旦那さんだ。亭主関白。小学生の俺がその言葉を知ったのは、このお爺ちゃんの影響だった。怖いお爺ちゃん。優しいお婆ちゃん。二人で外出する際は、決まってお爺ちゃんの後ろをお婆ちゃんがついて行くのをいつも見ていた。お爺ちゃんが誰かを怒鳴り、後でお婆ちゃんが謝る状況も、俺は何度も見ていた。

俺は子供の頃から、悪さをする度に、このお爺ちゃんに叱られていたのを思い出した。

そんなお爺ちゃんだが。俺が中学に入った年に死んだ。お婆ちゃんと散歩中に信号無視をしてきた車に轢かれて亡くなったらしい。

「そう、わしは死んだんだ。それはわかってる」

お爺ちゃんが言った。いつものように声に覇気が無い。顔も俯いている。

「じゃあ、何故そのような姿に？」

アダムが質問した。

「わしは死んだ。そして、幽霊になった」

幽霊……。そう聞いて、俺は嫌な予感がした。

「しかしな、自分の姿が消えそうになっている事に気が付き、慌てて野良犬の身体に入った。まさか入れるとは思わなかったが、気が付けばこんな姿じゃ」

うわぁ……。なんとなくお爺ちゃんがなんで怒ってるかわかって

きたよ。認めたくないけど。

「いろいろ情報集めてたら、お前の能力とやらに行き着いた。だからわしはお前が憎いのじゃ」

ほら来たよ。俺恨まれてるよ。何でこうなるんだよ。ほんと。

「まあまあ、彼も好きでそんな事をやっているわけではないので……。実際彼は自分の能力を知ったのはごく最近です。そんなに責めないでいてあげてください」

そう言っ、アダムは土下座した。俺の代わりに。俺は少し嬉しかった。こんなに近くに、俺の理解者がいる事を。

「まあ替わりとっては何ですが、今日は彼を好き勝手使っ下さい。何だかんだ言っても、彼が全て悪いんですから」

前言撤回。こいつ、いつか殺す。

「そのつもりさ」

そのつもりなのかよ！ 何やらせる気だよこのブルドック！

「わしが今こんな姿なのはお前の責任じゃ。だから、わしを成仏させてくれ」

「え？」

成仏……。死んだ霊体がこの世から消える事。そう聞いた事がある。でも信じた事は無い。そもそも霊体なんて存在しないとずっと思っていた。それは死を恐れた人間の恐怖を緩和させるための偽り物語だ。死は無。俺はずっと思ってきた。でもわからなくなってきたのは事実だ。花子さんといい、お爺ちゃんといい。もしかしたら……そう考え直している自分が意外だった。

「お爺さんは成仏したいのですか？」

アダムが訊いた。お爺ちゃんは真剣な目で頷いた。

「この世に未練がある」

お爺ちゃんが言っ。未練……。一体何があるというのだろうか……。

「婆さんの事なんだが……」

婆さん。それはきつと山田のお婆ちゃんの事だろう。

「わしは、婆さんに何もしてやれないまま死んだ。それが気掛かりなんだ。だからわしは成仏出来ない」

さっきまでの表情が嘘であるかのように、お爺ちゃんの顔が暗くなった。真剣なんだ。真剣にお婆ちゃんの事を想っているんだ。お爺ちゃんの言動が全てを物語っていた。

「だから……せめて、こんな姿でも、少しは婆さんに恩返ししてあの世に行きたいんだ」

それがお爺ちゃんの未練……。最後の願いだった。

『ピンポーン』

インターホンの音が鳴った後、ドアがゆっくり開いた。山田のお婆ちゃんが顔を出し、俺に気が付くと笑顔になった。

「あら、有ちゃん。どうしたんだい？」

俺はお辞儀をしてお婆ちゃんの顔を見た。最近になって一段と痩せ細ったように見える。昔から心臓に病気を持っているらしく、激しい動きなどは出来ないと言ったことがある。ドアから出たお婆ちゃんはゆっくり、俺に歩み寄ってきた。

「有ちゃん、今日はもう学校終わったのかい？ 家においしいりんごがあるんだけど、食べてくかい？」

お婆ちゃんはこうやっていつも、ご飯やお菓子を俺や妹の杏にご馳走してくれていた。

「お婆ちゃん、ありがとう。あのさ、今日は俺の友達も一緒なんだけどいいかな？」

俺はお婆ちゃんにそう言った。

「あら、有ちゃんのお友達かい？ いいに決まっているじゃないか」お婆ちゃんの言葉に一安心した俺は、塀の陰に隠れていたアダムを手招きした。アダムの胸にはあのお爺ちゃんが抱かれている。

「あらあら、外人さんかい？」

アダムを見たお婆ちゃんは目を丸くして驚いた。まあ確かに、どうみてもこいつ、日本人には見えない。

「外人？ いやそれは違う。僕はうちゅ……」

「そうなんだ。外人の友達のアダムって言うんだ」

俺はアダムの口を塞ぎ、そう紹介した。宇宙人なんて言わせない。絶対。

「そうかね。私は外人さんこんなに近くで見るの初めてだよ」

そう言った後お婆ちゃんは、ゆっくり目線を下げていった。そして、ある一点を見つめた。アダムの胸に抱かれた、お爺ちゃんを見ている。

「まあ……お入り」

お婆ちゃんはお爺ちゃんの顔を見つめたまま、そう言った。

家に入り、居間に通された俺とアダムとお爺ちゃんは、台所へ向かっていったお婆ちゃんを暫く待っていた。きつと、さっき言っていたおいしいりんごを切ってくれているに違いない。お婆ちゃんに会ってから、あれほど五月蠅かったお爺ちゃんも静かに辺りを見回している。

「お待たせ。りんご持って来たよ」

お婆ちゃんがお盆にりんごの盛られたりんごとお茶を三つ乗せて運んできた。卓袱台に乗せると、お婆ちゃんが俺の前に座った。右隣にはお爺ちゃんを抱いたアダムがいる。そのお爺ちゃんを、お婆ちゃんはじつと見ている。

「その犬……」

お婆ちゃんが呟いた。やっぱりお爺ちゃんが気になっているのは確かなようだ。

「誰かに似ているような……」

お婆ちゃんの目線は、ずっとお爺ちゃんの顔を見続けている。お爺ちゃんも目線を一向に逸らさない。何だか今のこの状況を見ると、何だか心が温かくなる。俺は素直にそう思った。

「抱いてみますか？」

アダムがそう言って、お爺ちゃんをお婆ちゃんの方へ差し出した。お婆ちゃんは暫く静止していたが、アダムから静かにお爺ちゃんを

受け取った。さらに近くなった二人は、見つめ合ったまま停止した。
「あなた……」

静かにお婆ちゃんが呟く。そう、その犬はお爺ちゃんなんだ。お婆ちゃんもそれに気が付いたようだ。

「このワンちゃん……死んだお爺ちゃんに似てるわ」

そう。そっくりなんだ。お爺ちゃんそっくりの犬。いや、お爺ちゃんなんだ。お婆ちゃんの目が赤くなり始めている。感動の再会を目の当たりにして、俺の目頭も熱くなった。アダムは既に涙を流している。

「このワンちゃんを見てみると、お爺ちゃんを思い出して……」

そこでお婆ちゃんの言葉が詰まった。もうダメだ……その先を言わないで……。耐えられない。お爺ちゃんも目に涙が溜まっていた。良かった。本当に良かった。

「ムカムカする」

え？

「ムカつく。マジムカつく。首絞めたくなる。本当に何でお爺ちゃんそっくりなの。あームカつく」

ちょ……待つて。お……お婆ちゃん？

「やっと忘れられてきたのに。この犬のせいで思い出したわ。あー嫌な気持ち」

お婆ちゃん？　なんか人格違うんですけど。あれ？　何かおかしい雰囲気だぞ。アダムも俺の目を見て困っている。お爺ちゃんも助けを求めるような表情で俺を見つめている。多分お爺ちゃんが一番驚いているんだろうけど……。

「死んでいい気味だと思っていただけ。またわたしの所に戻ってくるなんていい度胸ね。また死にたい？　また死にたい？」

俺とアダム、それにお爺ちゃんは、公園のベンチに腰を掛けていた。お婆ちゃんの予測不可能な発言を目の当たりにしたお爺ちゃんは、あの後慌ててお婆ちゃんの腕から逃げだし、外に駆け出している。

った。俺とアダムもその後を追い、お婆ちゃんを一人残しお爺ちゃん搜索を開始した。暫く近所を捜し、近所の公園のベンチで俯いて小さくなっていたお爺ちゃんを発見したのが数分前の話だ。

「ねえ。泣いていいかな」

お爺ちゃんは呟いた。俺とアダムは、そっとお爺ちゃんの肩に手を置き、深く頷いた。

「これで、思い残す事は無いですね」

アダムが言った。

「うん。無いね。ある意味無いよ」

「これで成仏出来ますね」

アダムが畳み掛けた。

「うん。成仏出来る……かな。あの世で……幸せに暮らせる……かな」

お爺ちゃんが泣き出した。二人のやり取りを隣で聞いていた俺も、可哀相過ぎて泣きそうになった。

「あのさ、わしは成仏するべきなのかな」

俺に訊かないでくれ。そうだとしか言えないよ。

まさかこんな状況になるとは、俺もアダムもお爺ちゃん本人も思わなかっただろう。お婆ちゃんがあんなにお爺ちゃんを恨んでいたなんて。何だかとても気持ちが重くなる。お爺ちゃんにどんな言葉をかけてあげたらいいのかわからず、言葉を失う。

「もういいさ……」

お爺ちゃんが弱々しい声で呟いた。気が付くとお爺ちゃんは空を仰いでる。

「婆さんはわしを必要としていない事が良くわかった。これでいいんじゃない」

そう言つて、お爺ちゃんはベンチから降りると、力ない手足でゆっくり歩き始めた。

「どこに行くんです?」

アダムの言葉にもお爺ちゃんは無言だった。きつと行く当てなど

ないのだろう。

「ユウ、いいのかい？」

そんな事を訊かれても、俺にだってどうすればいいかわからない。俺は黙ってお爺ちゃんの後姿を見ていた。

お爺ちゃんが公園の敷地を出た時だった。俺は気が付いた。お爺ちゃんに向かつて、一台のトラックが向かっていった。お爺ちゃんは気が付いていない！

「お爺ちゃん！ 危ない！」

俺はお爺ちゃんに向かつて走った。お爺ちゃんは俺の声に気が付き、トラックを見たが、あまりにも突然だったためか、身体が動かないようだ。俺はとにかく走った。間に合うかわからなかったが、ひたすらお爺ちゃんに向かつて走った。

その刹那だった。

路地から現れたお婆ちゃんが、お爺ちゃんを守るように抱きかかえ、その場で蹲った。それに気が付いたのか、トラックが急ブレーキを掛け、お婆ちゃんのギリギリ手前で停車した。

「あ…… 危ないだろ……！」

トラックの運転手が窓から身を乗り出してお婆ちゃんを怒鳴った。お爺ちゃんを抱きかかえたまま立ち上がったお婆ちゃんは、何度も申し訳無さそうに頭を下げ、公園の中に入ってきた。トラックの運転手はそれを確認すると、窓を閉め、トラックを発進させいなくなった。

「お…… お婆ちゃん！ 大丈夫！？」

俺の声を聞き、緊張の線が切れたのか、膝から崩れるかのようにして、地面に腰を下ろした。

「何やってるの……！」

お婆ちゃんは抱きかかえたお爺ちゃんに対して叫んだ。お爺ちゃんは怒鳴られて目を丸くしている。

「本当にお爺ちゃんそっくりよ！ いつもいつも私を困らして……」
そこまで言って、お婆ちゃんは泣き出した。

「私が身体弱いからって、いつもいつも自分の事を後回しで、私の事ばかり気遣って。それで死ぬ瞬間も私が車に轢かれそうになった時も、私を助けて代わりに死ぬなんて！ 本当に馬鹿よ！」

お爺ちゃんを強く腕で抱き、お婆ちゃんは泣き続けた。お爺ちゃんの目にも薄っすら涙が浮かんでいる。

「私だってお爺ちゃんのお世話したかったわよ。死んじやったらもう恩返し出来ないじゃない」

それがお婆ちゃんの本音だった。お爺ちゃんも声にならない小さな声で泣き出した。あんなに頑固なお爺ちゃんの涙を見るのは、これが初めてだった。一瞬、お爺ちゃんが光ったと思った次の瞬間、お爺ちゃんの霊体の様な物が浮かび上がり、空に上がっていった。

「成仏……出来たんですね」

アダムが呟いた。俺は空にゆっくり昇っていくお爺ちゃん的笑顔を、見えなくなるまで見つめていた。

ふと気が付くと、お婆ちゃんに抱かれたブルドックが、舌を出し、僕の顔をじっと見ていた。

「へえー。それじゃああのブルドック、お婆ちゃんが飼う事にしたんだね」

杏が朝食のスープを息で冷ましながら、俺に言った。俺はパンを口で加えながら頷いた。

「やった！ それじゃあすぐ会えるね」

杏は笑顔でスープを口に流し込んだ。

朝食を食べ終わった俺は支度をして家を出た。お婆ちゃんの家の前を通ると、お婆ちゃんの家の中に犬小屋が設置されていた。その横には縄に繋がれたブルドックがお皿に盛られたドックフードを無我夢中で食べている。俺が足を止めてその犬を見ると、犬も俺の気配に気が付いたのか、食事を停止し、ゆっくり顔を上げた。

「……どうして？」

驚きのあまり俺がそう口に出すと、口周りに付いたドッグフード

の欠片を舌で舐めながら「意地で戻ってきた」と小さな声でお爺ちやんが呟いた。

宇宙人

「宇宙人って知っているか？」

「知っている」

驚いた顔の進一が、俺の隣に立っていた。しまった……。つい口に出てしまった。俺は今、宇宙人と同棲している。進一が驚くのは無理もない。しかし一番驚いているのは自分自身だった。アダムが家の居候になつて、もう一ヶ月経つ。そんな生活が続いているからなのか、俺の中で宇宙人という非現実的な存在を信じ始めているのだろうか……。

「意外な事を言うな？ どうした？」

進一が俺の顔色を窺いながら俺に質問した。

「何でもない……噂話で聞く程度だよ」

まさか、宇宙人が家にいるからなど口が裂けても言えない。俺は進一に目を合わせることをせず帰り支度を続けた。

「変なの。まあいいや。それでな、七不思議の一つがその宇宙人なんだ」

お決まりの流れだ。進一はその七不思議って産物に侵されているらしい。何か新しい七不思議の話があるたび、決まって俺に言うてくる。花子さんしかり、人面犬しかり。

「何でも、夜中の4時に学校の屋上で宇宙人を見た人がいるらしいんだ。人がいると思つたら、光の柱みたいな物が出来て、あつという間に空に上がって行つたんだってさ。そんで空に浮かぶ光源体が凄いスピードでどこかへ行つたのを見た奴がいるらしいよ」

何か、今回の犯人わかつたかも。俺、正直そんな感じの見たことがあるもん。俺の部屋で。

「そうか、大変だな。俺用事があるから帰るわあ」

そう言つて、俺は夢見る進一を教室に残し、犯人を殴るため家に帰つていった。

「僕じゃありません」

土下座をしたアダムが、泣きそうな声で言った。部屋に入ってきた俺を見た瞬間、俺の憤怒の形相に気が付いたらしくこの有様だ。

「まだ俺何も言っていないだろ」

「はい。でもユウのこのパターンは知ってます。僕が理不尽に暴行される王道パターンです」

そんな王道が存在したのか……。

「じゃあお前、心当たり無いか？ 学校の屋上で宇宙人がいたって言う噂があるんだけど」

その話を聞きアダムがゆっくり顔を上げた。表情が硬く、冷や汗が出ている。

「……知ってるな？」

アダムの胸倉を掴み、顔を近づける。目を逸らすアダム。こいつ何か知ってる。

「それ、あたしよ」

背後から女の子の声が聞こえた。振り返ると、そこに俺と同じ年位の女の子が立っていた。刹那、俺は彼女の容姿に驚いた。黒髪ツインテールの女の子が、漆黒色のスクール水着の上に白色の革ジャンのような服を羽織り、またまた白いロングブーツを穿いているのだ！ 前髪は目の上で真っ直ぐ整えられ、肌は透明かと思えるほど白い。手にはバイクを乗る人が身に付けるような白い手袋をしている。腕に時計のような物を付けているが時計にしては大きい。そんな出で立ちの中で、一際目を引くのは、アダムと同じ様に、頭部にアンテナのような物を付けている。

それにしても、目のやり場に困る。こんな女の子の姿を目の前で見るなんて、純粋な俺には眩しすぎる。

「イヴ！ 何しに来た」

アダムが言った。イヴ？ 彼女の名前だろうか。

「ちよつとユウを見に来ただけよ。別にいいでしょ？ お兄ちゃん

……」

お・兄・ちゃ・ん！？　じゃ……じゃあ、アダムの妹！？　驚いた俺はアダムと女の子を交互に見た。

「はあ……もうしょうがないな。紹介するよ。僕の妹のイブだ」
アダムが溜息混じりに紹介をした。

「始めまして。イブよ。……へえ、ユウってこんな人間なんだ」
そう言って、イブは俺をいろいろな角度から観察した。アダムの妹とはいえ、女の子のこんなにジロジロ見られるには正直恥ずかしい。

「へえ、思っていたよりはダサくないわね。でも格好良くもないわ」

胸を抉るような発言を聞いた俺は、眉間に皺を寄せ、鋭い目つきで睨んだ。アダムを。

「……わ、悪気があるわけじゃ……無いんだ。イブは幼い頃から星の英才教育で、地球人の『ツンデレ』を学んでいる。イブにとって『ツンデレ』は身体に染み付いているのだから」

染み付けるものなのか？　ツンデレ……アニメなどを見ない俺でも知っている。ツンとした態度をした女性が、最後にデレデレしてくる性格に、全国の男達が魅了されているらしい。進一談。まあわからなくもない。身近にそんな女の子はいないが、いたらちよっと見てみたい。……と思っただけどさ。なんか……。

「どうしたのユウ？　何か問題でもあるの？」

俺の顔をじつと見ながら、イブが訊いた。問題って……。

「残念ね……もっと喜んで欲しいものだわ」

小さな溜息を吐きながら、イブは腕を組んだ。少し不機嫌な表情で、俺を睨んだ。

「せっかく私がこの物語のヒロインになってあげようと思ってるのに」

「物語！？　これが物語りだって言うのか！？」

俺は慌てて叫んだ。この子は一体何を言い出すのか。

「もしもの話よ……。冴えない日常に突如現れた宇宙人のお兄ちゃん。そうして、自分自信の知らない能力に気が付いている。ほら、その辺の小説にありそうな話しよ。もしもこれが小説なら、私みたいな可愛いヒロインがいないと売れないわ」

小説かよ！ 俺の人生は！ それにさり気無く酷い事言いやがった。冴えない日常？ ほっとけ！ それに自分を可愛いって。逆にすげえよ！

……落ち着け。自分を乱すんじゃない。落ち着け。

「よし、いいだろう。仮に俺のこの人生が小説か何かだとして！ それにしてはヒロインの出現が遅すぎるんじゃないか！？ 小説なんてあんま読まないが、進一に聞いた小説や漫画ではヒロインはわりと初期に出てきてるはずだろ？」

我ながら何を言っているのだろうと思った。俺の隣でアダムは静かに正座をしていた。俺の言葉を聞いたイヴは、ニヤリと笑うと。俺の顔に自分の顔を近づけて続けた。

「大丈夫。その点はちゃんと考えてあるから」

何だろう。凄く自慢げな表情が何だかムカつく。

「これが小説の世界だったら………」

「だったら？」

「表紙に私の可憐な横顔を大きめに載せるわ。私が悲しそうに空を眺めている姿は、かなり萌えるはずよ」

それ詐欺だろ！？ 全然出てこないキャラクターが表紙を飾るなんて、過大広告だろ！！

「そうすれば個性の薄いユウやお兄ちゃんでは売れない小説が売れるようになるのよ？ 不満？」

「ただ女帝気質だよ！」

「まあ、イヴよ。そのへんにしとけ」

散々黙っていたアダムが、イヴに言った。

「しかし、イヴ。お前はエデン星にいたのではないか？」

アダムの問いにイヴは腕を組んだ。不機嫌そうな顔でアダムを見

下している。

「お兄ちゃんがすっかり仕事してないからでしょ？ 私が手伝いに来たの」

イヴはそこまで言うと、俺の頭に手を置いた。そしてゆっくり俺の頭を撫でた。

「今日は挨拶に來ただけだからもう帰るわね。それまで私達を消しちゃダメよ。もしそうなりそうだったら、あなたを消すわ」

イヴはゆっくり窓に近付いていく。次の瞬間、俺の部屋は光に包まれた。それは、アダムと初めて会った、あの日と同じ現象だった。眩い光は瞼を閉じても感じられるほどだった。

暫くして目を開けると、イヴはいなくなっていた。横を見ると、アダムもボーっと窓の方向を見ていた。

そこで一つ、俺には疑問が湧いた。

「デレは？」

次の日、俺の悲劇は続いている事に気が付いた。

「今日は転校生を紹介する」

担任の教師がそう言って、廊下に向かって手招きした。ゆっくりと教室に入ってくる女生徒に、クラスメイト達はざわめいた。

「では、簡単な自己紹介をしてくれ」

そう言われた女生徒は、教壇の中央に立ち、一礼した。

「初めまして。私はエデンⅡイヴと言います。転校してきて不安な事がいっぱいなので、皆さん仲良くしてくださいね」

そう言って、イヴが微笑んだ。

…… 奴は何をやってるんだ……。しかも、あんな清纯そうな性格だったか？ というか、イヴを見る周りのクラスメイトの表情が恍惚としている。男も女も。何というか、アイドルでも見るかのような視線だ。

「エデンさんはフランスからの留学生です。みんな仲良くするよう

に。じゃあエデンさんは有森の隣の席が空いてるからそこに座るよ
うに」

何で席空いてるんだよ!? あれ? 昨日まで俺の隣の席にいた
田中君は!? 何で一番後ろの席に移動してるの!? うちのクラ
スって25人だから昨日まで5×5の並びでいい感じだったのに、
なんで田中君一番後ろで出っ張ってるんだよ! しかも何か表情哀
しげだし! あれ? 涙目だよ? 先生、うちのクラスでいじめが
起きてますよ! 何か陰謀が犇いてますよ!

「よろしくね、有君」

先生、質問です。……何で転校生が僕の下の名前知ってるんです
か?

昼休み、何故か転校生のエデンさんに校内を案内してあげるとい
う命令を受けた俺は、イヴと共に廊下を歩いていった。擦れ違う生徒
は全員、イヴに夢中のように、廊下の左右は人が並んでイヴに歓声
を送っている。

俺は溜息混じりに、校内の施設を説明していった。気乗りしなか
ったが命令の通り職員室や体育館、音楽室や理科室などを回った。
暫く黙っていたイヴが、静かに口を開いた。

「ねえユウ……屋上へ行きましょう」

俺の隣で笑顔を振り撒くイヴが言った。

「何故だ? 理由を述べてくれ」

イヴは生徒達に手を振っている。さながら皇太子様のように。生
徒達はイヴに向けて携帯電話のカメラを向けて写メを撮っている。

「こんなに人が多くては話せないから」

顔は崩さない。その辺のアイドルよりアイドルである。

「なら家で話せばいいだろ?」

俺が言うつと、イヴは足を止めた。

「お兄ちゃんにも言えないからでしょ」

俺とイヴは屋上に上がってきた。イヴの表情は武装解除され、笑顔が消えていた。

「話って何だよ。それに、アダムにも言えないって……」

俺がイヴに問いかけた。イヴは柵に背中を預けると、俺の目を見た。真剣な眼差しが俺の心を不安にさせた。

「ユウ。あなたは自分の能力の事はどこまで理解している」

「何だよ急に……」

イヴから返答は無かった。暫くの沈黙の後、俺はアダムから教えてもらった自分の能力とやらを話した。イヴは終始無表情で俺の話を聞いていた。俺の説明を聞いた後、イヴは言った。

「そう……そこまでは聞いているのね」

俺は『そこまで』という言葉が気になった。それ以上があると言うのだろうか。

「結論から言うわ。あなたは自分の危険性に気が付いていない」

俺は息を呑んだ。俺が危険？ どういう意味だろうか？

「あなたの能力は『自分の信じない物を存在させなくする能力』じゃないの。本当に危険なのは『信じるものを存在させる』能力よ」
「!？」

俺はイヴの言葉に驚いた。アダムの聞いていた俺の能力ってヤツとは内容が違う。……いや、同じなのか。逆転の発想ってやつか。俺が信じない物は存在しなくなる。でも、信じる物は存在する。それが何を意味するのか俺にはわからないが、何だか嫌な予感があった。
「お兄ちゃんがあなたの元へ来た理由、それも聞いているわよね」
俺は頷いた。俺に存在を認めて貰う為。そうして、自分達宇宙人を存在させる為。そう聞いている。

「そう……それが、私達『エデン』が実行した最初のプラン」

最初の？ 何でこんな回りくどい言い方するんだ。

「私は、お兄ちゃんが実施しているプランに支障が及んだ場合、第二のプランを実行する為に『エデン』より派遣されて来たの」

イヴの顔が怖かった。俺は息を呑んだ。

「第二のプラン。それは『有森有を確保』する事。あなたを確保して、『エデン』に戻り、あなたを洗脳する事が第二のプラン……」
「待てよ！」

暫く黙って話を聞いていた俺も、もう我慢の限界だった。

「お前達にそんな事をさせる権利はないだろ！……それに……ほら、お前だつて存在しているだろ？ 何が問題あるんだよ！ 俺を洗脳って……そんな事する必要ないだろ？ 何でそんな……」

イヴは俺の喉に手をやり、首を絞めた。そのまま押され背中をフエンスに押し付けられた。……い……息が出来ない。

「そんな簡単な事じゃないの！ 最後まで話を聞きなさい。このまま殺されたいの！？」

イヴの腕を無理矢理放そうとしたが、力が強すぎてビクともしなかった。俺は自分の置かれた境遇を理解し、静かに手を下げ、無抵抗を表現した。それに気が付いたのか、イヴの腕の力が弱まり、開放された。俺はその場に腰を落とし、自分の首を摩った。酸素を一度に吸いすぎたせいか咳が止まらなかった。

「あまり手荒な事はしたくないの。黙っていてくれる？」

言われなくても、喉が痛くて声なんか出ない。座っている俺の目の前に屈んだイヴは、俺の目を見ながら話を続けた。

「最初はね。お兄ちゃんのプランで大丈夫だった。私も安心してたわ。でも、あなたの能力はそれではダメだった。さっき言っていた話覚えているわよね」

俺の能力。俺が信じない物を存在しなくさせる能力。俺が信じる物を存在させる能力。

「最近、私やお兄ちゃん以外の事で、何か変わった事なかった？」
変わった事……。アダムが来てから変わった事ばかりだ。幽霊の花子さんに、人面犬になつてしまった隣のお爺ちゃん。そんな非現実的なモノに出会うようになった。変わった事が多すぎる。

「お兄ちゃんから報告は受けているわ。あなたの周りに、あなたが信じていないはずの存在が存在し始めている。それは、あなたが信

じたから。あなたが存在を認めたから」

確かに……。少し前の俺なら、きつと信じていなかったんだろう。でも、俺の前に現れた。そして今は俺は、花子さんも、お爺ちゃんも、そしてアダムやイヴも認めている。だから存在出来ているんだ。変わった事……。一番変わったのは俺自身なのかもしれない。

「ただ、あなたが存在を認めるきつかけがあるはずよ。よく思い出して。あなたが私やお兄ちゃん以外の存在を認めるようになるきつかけがあるはずよ」

きつかけ……。？ そんなもの別に……。いや、ある。一つだけ。でも、それが今何の関係があると言うのだ？

「私達『エデン』は、お兄ちゃんのプランと同時進行で、第二のプランを視野に入れた調査を行うために、私が派遣されたの。それは、あなたの能力を利用する人間がこの地球に存在するかもしれないという情報が入ったからよ」

いや……。待てよ。そんなはず無いだろ？ だって……。そんな事をして何の意味があるんだよ。

「私はそんな存在を調査する為にここへ来た。この学校に転校生として潜入した。その意味がわかる？」

イヴの言いたい事は察しがつく。でも、そんなはずは無い。だってあいつは……。あいつに限って……。

「まだまだ話したいことはあったけど、時間切れのようね」

そう言っつて、イヴは立ち上がった。イヴは校庭の時計を見ていた。昼休みがもう少しで終わってしまふ。

「まだ調査段階だから私達は暫く様子を窺うわ。相手側がどんな理由であなたを利用しようとしているかわからないから、今は何もしないわ」

俺は無気力になりながらもどうにか立ち上がった。イヴは校舎の入り口に向かって歩いていった。暫く歩いた後、その場に立ち止まったイヴは、振り返らずそのままの姿勢で続けた。

「でも、もし私達に何か支障が出る理由だった場合、第二プランは

実行するわ。あなたも彼の行動に気をつけるべきね」

多分イヴは本気なんだと思う。俺は何故かそう感じた。

「一つだけ教えてくれ……何故アダムに……自分の兄貴にそれを言わない？」

俺の問いに対して、イヴは暫く何も言わなかった。そして、小さな声で囁いた。

「お兄ちゃん、優しすぎるから」

俺は何も言わず、イヴについて行く様に教室へ向かった。教室に戻ると、クラスメイトの視線が俺とイヴに集中した。いや、正確にはイヴだけなんだろうが。俺は自分の席に座ると、進一が俺の席までやって来た。

「おい、お前。今までエデンさんとどこへ行って来たんだよ」

小声で話す進一の笑顔を見て、その笑顔の奥にある何かを疑っている自分自身が嫌いになりそうだった。

「ただ校内の案内だよ。席つけよ。授業始まるぞ」

「何だよ、冷たいな」。また後で話し聞かせろよ」

そう言っただけは、ニヤニヤした表情で自分の席に戻っていった。ふう、と小さな溜息を吐き、隣の席に視線を送った。イヴが席に戻っていく進一を、まるで悪いヤツを見るかのような軽蔑した目で見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2993r/>

現実主義者

2011年5月27日19時10分発行